

梅雨明け後の高温乾燥条件下における 農作物等の技術対策

福島県農林水産部農業振興課

本年の東北南部の梅雨明けは、観測史上最も早く、平年より25日早い6月29日頃と見られています。梅雨期間が短く、降水量は平年に比べ少なくなっており、梅雨明け後は高温条件で経過しています。

仙台管区气象台発表の東北地方1か月予報によると、向こう1か月の天気は、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、期間の後半は平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

7月9日～15日の気温は高い確率が80%、7月16日～22日の気温は高い確率が50%、7月23日～8月5日の気温は平年並または高い確率がともに40%となっています。

今後も気温の高い日が続く見込みですので、農作物や家畜等の管理を徹底してください。また、管理にあたっては、熱中症対策など健康管理に十分注意しましょう。

表 梅雨期間降水量 (6/15から6/28まで)

	降水量 (mm)	平年値 (mm)	平年比 (%)
福島	40.0	68.4	58
若松	39.0	63.7	61
白河	18.0	83.6	22
小名浜	9.5	77.7	12
郡山	13.5	67.7	20
田島	25.5	65.8	39
相馬	15.5	78.2	20

※アメダス観測値(速報値)

1 農作業時の留意点

高温条件下における農作業では、作業者の体調管理に十分注意しましょう。特に、気温が高くなると、熱中症をおこしやすくなるので注意が必要です。このため、作業者の健康管理に配慮し、作業環境の改善に努めましょう。

(1) 留意点

- ア 農作業はなるべく暑い時間帯を避けて行い、休憩を頻繁に取りましょう。
- イ 汗で失われる水分や塩分は、こまめに補給しましょう。
- ウ 通気性の良い作業着や帽子を着用するなど、服装に注意しましょう。
- エ 簡易の移動性テントなどを使用し、なるべく日陰での作業ができるよう工夫しましょう。

(2) 応急処置

熱中症が疑われる症状が現われた場合は、応急処置として涼しい場所で身体を冷し、水分及び塩分の摂取等を行いましょ。また、速やかに医師の診察を受けるようにしましょう。

2 水 稲

7月が高温に経過すると、幼穂形成や出穂が早くなる可能性があります。品種ごとに生育状況を確認し、適切な管理を行いましょ。

(1) 水管理

ア 中干し後の水管理

中干しは幼穂形成期まで実施し、その後は田面の亀裂にしみわたる程度に入水、なじませたのち間断かんがいとしましょう。また、穂ばらみ期から開花期は湛水状態を保ち、その後、登熟期間は間断かんがいとしましょう。

イ 節水対策

用水が不足しやすい地区では、間断かんがいにより節水に努めましょう。また、用水路や水田を見回り、漏水の防止に努めましょう。

(2) 肥培管理

出穂後も高温に経過すると、出穂期の葉色低下は白未熟粒や胴割粒の発生を助長します。各品種の生育目標値を参考にし、極端に葉色が低下している場合はつなぎ肥により回復を促しましょう。

また、分肥体系により穂肥を行う場合は、葉色や生育量に応じた施肥量を、幼穂の発育状況を観察し、適期に施用しましょう。

(3) 病虫害防除

ア 斑点米カメムシ類

休耕田の管理、畦畔の草刈りを徹底しましょう。なお、出穂間際の草刈りはほ場に斑点米カメムシ類を追い込むので、草刈りは出穂10日前までに行いましょう。

斑点米カメムシ類の発生が多い地域は、薬剤による防除を徹底しましょう。

イ いもち病

葉色が濃く窒素栄養が過剰な場合やいもち病の常発地帯では、穂いもちの発生に注意し、上位葉に発病を確認した場合は、直ちに散布剤により防除を行いましょう。

3 大豆

雑草の発生や生育が早まるので、状況を確認し、除草剤や中耕等による防除に努めましょう。

4 野菜

(1) 施設栽培での高温対策

側面と妻面を解放して換気を図りましょう。きゅうり、トマト等において高温による生長点の萎れが見られる場合は、日中の暑い時間帯は遮光、遮熱資材を活用しましょう。

(2) かん水

かん水は、朝夕の気温が低い時間に行いましょう。特に果菜類では、かん水チューブを用いて過不足ないよう少量多回数行うのが望ましい方法です。なお、畦間かん水を行う場合は、長時間水を溜めないように注意しましょう。

(3) 敷きわら等

露地栽培では、通路等への敷きわら等を厚くし、地温上昇と乾燥を防止しましょう。

(4) 草勢の維持

きゅうり、トマト、さやいんげん等の果菜類やマメ類は、不良果や不良莢を早めに摘み取り、株への負担を軽減し草勢維持に努めましょう。また、老化葉の摘葉を行いましょう。

追肥は、液肥やペースト肥料の土壌かん注を行うとともに、葉面散布を併用しましょう。

(5) 生理障害対策

トマトやピーマンの尻腐れ果対策として、かん水による土壌水分の保持に努めるとともに、カルシウム資材の葉面散布を行いましょう。

(6) 病害虫防除

かん水後は、一時的に作物の周辺が多湿となり、きゅうりの炭そ病や褐斑病、トマトの葉かび病等の病害が発生しやすくなります。また、乾燥時は、ハダニ類等の害虫類の発生が多くなりますので、農薬の使用基準を守って適期防除に努めましよう。

(7) 収穫物の鮮度保持

きゅうりでは、フケ果（ス入り果・先膨れ果）の発生が懸念されます。収穫物を直射日光に当てない等、品温の上昇を防ぎましよう。また、鮮度パックの使用等により品質保持を心がけましよう。

5 果 樹

夏期の高温・乾燥条件下では、樹体や土壌からの蒸発散量が増え、果実の肥大不良や樹勢低下、果実や枝幹部の日焼けなど様々な障害が発生しやすくなります。特に、梅雨明け直後は、根の機能が低下しているため注意が必要です。かん水や、草刈り・マルチ等の実施により、土壌の水分管理を徹底ましよう。

(1) かん水

盛夏期における果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度であるので、1回のかん水は25～30mm程度（10a当たり25～30t）を目安とし、5～7日間隔で実施ましよう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くましよう。

ただし、ももでは、収穫5～7日前以降のかん水は糖度など品質の低下につながりやすいので、かん水が必要な場合は早めに実施ましよう。

(2) 草刈り・マルチ

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましよう（草生園における地表面からの蒸発散量は、刈り草をマルチした場合は、草刈りしない場合の約半分とされています）。

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましよう。

(3) 新梢管理

徒長枝などの不要な枝はせん除して、水分の消耗を防ぎましよう。ただし、過度のせん除は樹勢低下を招くため、切りすぎないように注意ましよう。

主枝や亜主枝の背面に発生した徒長枝や発育枝は、強い枝を中心に除去し、日焼け防止等のため、弱めの枝を適当な間隔で配置ましよう。なお、もも等では基部葉を残してせん除ましよう。

(4) 適期収穫

収穫前から収穫期に高温・乾燥条件で経過する場合は、果実の成熟に影響が大きいので、果実の着色、地色の抜けや果肉の軟化等の成熟状況に注意し、適期収穫を徹底ましよう。

また、収穫時の果実温度が高いと果実が軟化しやすい傾向にあるため、収穫は気温が低い時間帯に行い、収穫後は直射日光を避けて涼しい場所に保管ましよう。

(5) 病害虫防除

高温下においては害虫の世代交代が早まり、増殖が助長される傾向があります。特に、ハダニ類が急激に増加しやすいため、発生密度を観察し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）になったら速やかに防除を行いましょう。

なお、主要害虫の防除に当たっては、発生予察情報を参考にしてください。

6 花 き

(1) 施設栽培での高温対策

側面と妻面を解放して換気を図りましょう。また、日中の暑い時間帯は遮光、遮熱資材を活用しましょう。

(2) かん水

キク、リンドウ等の露地栽培では、土の乾き具合を確認しながら必要に応じて畦間かん水等を実施しましょう。特に定植後間もない場合は適湿を保つようにしましょう。

かん水は、朝夕の気温が低い時間に行い、日中の暑い時間帯に畝間等に水たまりが残らないように注意しましょう。

(3) 遮光

リンドウ等では高温や強日射による開花遅延や花卉焼け等が懸念されるので、寒冷紗や遮光資材が利用できる場合は、30～50%程度の遮光を行ない、開花の遅れや品質低下を防止しましょう。

また、これから育苗時期にあたるストック等では、高温による蒸れや徒長が懸念されるので、遮光資材の利用や施設内の換気を実施して、良質な苗の生産に努めましょう。

(4) マルチ等

敷きわらや白黒ダブルマルチの積極的な活用によって、地温上昇や土壌乾燥を防ぎましょう。

(5) 葉面散布

高温期は、カルシウム欠乏による葉先枯れ症状（トルコギキョウ、リンドウ、ユリ等）や鉄欠乏による葉色の退色（ユリ、バラ等）といった生理障害が生じやすくなります。生育状況に応じて葉面散布を行い、養分補給を行いましょう。

(6) 病害虫防除

アブラムシ類、ハダニ類等は、高温乾燥条件で発生しやすくなります。発生状況をこまめに把握するとともに、適期防除に努めましょう。

7 飼料作物

牧草は盛夏期の高温・少雨の環境下では生育が滞り気味になりますので、刈り取りは適切な間隔をおいて実施しましょう。また、秋期の草量確保のため、2番草刈り取り後の追肥は、肥効が確保できるよう盛夏期を過ぎた後に行いましょう。

8 家畜・家禽の暑熱対策

夏期の高温環境では、家畜は体温上昇を防ぐために呼吸数や血流を増加させ、エネルギーを余分に消費する一方で、飼料摂取量が減少するために生産性が低下します。家畜の体温上昇抑制のため暑熱対策を徹底しましょう。

また、家畜の姿勢、採食量や反芻行動など家畜の行動をよく観察し、異常家畜の早期発見・早期治療に努めましょう。

(1) 畜舎内の飼養環境の改善

- ア 畜舎の窓・扉を開放し、換気扇、送風機により送風、通風促進を図りましょう。
- イ 扇風機やダクトファンで家畜に直接風を当て、家畜の体感温度の低下に努めましょう(牛に風速2m/秒の風を当てると体感温度を約8℃下げる効果があります。また、飼養密度を下げることも、家畜の体感温度低下に効果があります。)
- ウ 寒冷紗等を利用して畜舎内への直射日光を遮光し、畜舎内の温度上昇を防ぎましょう。
- エ 除糞、敷料の交換をこまめに行い、アンモニアの発生を防止するとともに、高温多湿とならないようにしましょう。
- オ 家畜をよく観察し、特に暑熱のダメージが大きい家畜については、畜体へ直接水をかけるなどの応急措置を行い、早期に獣医師の診察を受診しましょう。

(2) 飲水及び飼料の管理

- ア 新鮮な水を十分に飲水できるよう、給水施設を清潔に保ちましょう。
また、バルククーラーなどを活用し冷却水を与えるなどの工夫をしましょう。
- イ 牛は採食すると、ルーメン発酵による熱が発生します。質の劣る飼料はルーメン内の発酵熱を高めるため、良質な飼料を給与しましょう。
また、早朝及び夜間などの涼しい時間帯での給与や、飼料回数を増やすなどの工夫をしましょう。
- ウ 高温時は、発汗等により無機質の要求量が増えるので、体内代謝を正常にするために固形塩や主要ミネラル類をやや多めに補給しましょう。
- エ 夏期は食べ残した飼料が飼槽内で変敗しやすく、また変敗した飼料からハエ等の衛生害虫が発生することがあります。このため、食べ残した飼料は早期に片付け、飼槽は清潔に保ちましょう。
また、給与前の飼料は湿気が少ない冷暗所で保管し変質を防ぎましょう。

(3) 放牧家畜

- ア 放牧は、庇陰林のある牧区を使用するか、涼しい時間帯に放牧しましょう。
- イ 固形ミネラル塩や主要ミネラル類を補給しましょう。
- ウ 過放牧を避け、こまめに個体の観察を行いましょ。

その他、高温時の技術対策については「高温条件下における農作物等の技術対策」(令和4年6月21日発行 農業技術情報第7号)をご覧ください。

発行：福島県農林水産部農業振興課 TEL024(521)7344
○農業振興課ホームページ
以下のURLより他の農業技術情報(生育情報、気象災害対策、果樹情報、特別情報)をご覧ください。
URL：<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>